

平成23年度 京都府立大学地域貢献型特別研究 (ACTR) 成果

分類 番号	A	取組 名称	体感温度の認知を活用した健康と環境に配慮した行動の促進の可能性
研究代表者：生命環境学部（研究科）		教授：松原斎樹	
研究担当者： 京都府立大学（松原斎樹，柴田祥江，石田正浩，森下正修） 外部分担者・協力者（木原浩貴氏，岡花秀樹氏，藏澄美仁氏，岡田光博氏，黒光貴峯氏，飛田国人氏）			
主な連携機関（所在市町村、機関（部署）名） 京都府長岡京市教育委員会、NPO 法人京都府地球温暖化防止センター，京都大学コンソーシアム			
【研究活動の要約】			
<p>熱中症やヒートショックによる健康被害は多く，この原因による死者数は，交通事故を上回ると言われている。これを避けるためには，温湿度の実態を測定して，現状を把握するとともに，居住者が温湿度を把握して，適切に対処できることが重要である。また，同時に温暖化対策としての省エネルギーに配慮することも求められる。この観点から以下の3つを対象とした調査を行った。1. 住宅での夏期と冬期の温湿度の実態調査，2. 空調が導入されている小中学校の児童・生徒，教員，保護者の意識調査，3. 京都学生祭典の打ち水への参加による意識と行動の変化の調査，である。</p>			
【研究活動の成果】			
<p>住宅での夏期と冬期の温湿度の実態調査を行ったところ，夏期の室温かなり高く，熱中症発生の危険があることが危惧された。また，冬期は室の間の温度差がかなりみられ，最低室温もかなり低いのでヒートショックの発症が危惧されることが明らかになった。また，温湿度を知ることによって行動面での対策を促した例も見られた。</p> <p>小中学校の調査では，空調教室は今までの調査と同様に「学校環境衛生基準」を満たす 30℃以下であり，児童・生徒と教員ともに快適感，満足度は高い。しかし，座席による暑さや寒さの違いも指摘された。授業態度の改善には継続がみられた。児童・生徒は非空調教室への拒否感をもっているが，外で遊ぶことが減少したとはいえない。また，環境への意識については，エアコンが環境と結びつかない点もあるが，環境教育によって関心を高めることができると考えられる。</p> <p>学生祭典参加者の調査からは，環境配慮意識の高い人のさらなる変化が大きいことが示唆された。</p>			
【研究成果の還元】			
<p>H23/07/02 長岡京市立図書館3F大会議室 市民，教員，マスコミ，環境推進団体，自治体関係者等約60名「長岡京市・京都府立大学連携協定包括協定連携事業 学校空調導入と効果測定の研究報告会」伊坂善明，飛田国人，松原斎樹：公立小中学校への空調機の一斉導入に関する研究 温熱環境および教育面・健康面の効果，76(668)，887-895，2011</p> <p>松原斎樹・柴田祥江：住宅の熱中症と暑熱対策の実態，第36回日本睡眠学会・生気象学会合同シンポジウム「サマータイムを考える」抄録，2011</p>			
【お問い合わせ先】 生命環境学部環境心理行動学（建築環境工学）研究室 教授：松原斎樹			
Tel: 075-703-5426*		E-mail: n_mats@kpu.ac.jp	

参考（イメージ図、活動写真等）

